

村上忠順翁顕彰会報



刈谷市中央図書館 2階 村上文庫室

撮影：甲村正貴

★ 目 次 ★

- 会長の言葉 今を生きる我々が必要なこと P.2
- 歴史探訪
 - 「村上忠順ゆかりの地を訪ねて」 P.3
 - 忠順ゆかりの地を訪ねて P.3-4
- 村上忠順「歌合序文」と井上文雄 P.4-5
- 特別寄稿 徳川家康と大野東龍寺 P.5-7
- 令和4年度活動報告 P.7
- 第17回「忠順大賞」入賞作品 P.7-8

村上忠順翁顕彰会報 第34号

編集 村上忠順翁顕彰会事務局

発行 令和5年3月31日

今を生きる我々が必要なこと



村上忠順翁顕彰会

会長 石川 嘉仁

三年以上にわたり、人々の生活や子どもたちの学校生活、地域行事などあらゆる場面で影響を与えた新型コロナも、この先分類的変更、マスクのあり方等、コロナ禍前の日常に戻していく、そんな世の中の流れを感じています。一方で、感染拡大を防ぐために定着した生活様式を元のようにすべて戻していくかを考えたとき、そう簡単にはいかない、そんな気がします。これからは、すべてを元に戻していくことではなく、変えていくべきこと、変えてはならないものの判断を、その時の状況を的確に見極め判断をしていかなければなりません。その時大切なことは、先人のたゆまぬ努力、考え方など歴史からしっかりと学び、変えていくべきこと、変えてはならないものは何なのかを、今を生きる我々がしっかりと考えていくことではないでしょうか。最近

のニュースなどを見てみると、個人の権利主張や今さえよければいいという自分勝手な事件など、寂しさを感じてしまう時があります。

「温故知新」ふるきをたずねて新しきを知るという、論語の中にある四字熟語があります。過去にあったことをよく調べ、学び、そうして得られた知見を活かして新たな知識を得るという意味であります。忙しさにまぎれて忘れがちですが、今を生きる我々の生活は、先人のたゆまぬ努力があってこそこのことであり、あらためて先人を知り歴史から学んでいくことを大切にしていかなければならないと感じます。前林中学校区に暮らす我々だからこそ、知っていてほしい、伝えていってほしい村上忠順翁顕彰会活動の意義や考え方を、地域や会員の皆様と共に学んでいくことが、地域への愛着が育まれ、暮らしやすいまちに繋がっていくと感じています。

顕彰会の活動も総会や歴史探訪など諸行事が再開され、前林中学校、堤小学校、駒場小学校においても短歌づくりを通して忠順さんの考え方を児童生徒の皆さんが学ぶなど、とても嬉しく感じています。今回の

忠順大賞に応募していただいた作品は、世の中の変化を感じるすばらしい作品が多かったのではないかと思います。私は短歌の評価ができるほどの心得はありませんが、なんだか心が前向きにしてもらえた、そんな気がします。一般の方や子供たちが短歌づくりを通して忠順さんの生き方や考え方を学んでいただけていることに、本当に有難く、感謝しています。

また、令和四年度は村上忠順翁の偉業をPRし、更なる顕彰会活動の周知を図るために、ホームページを開設させていただきました。ひとりでも多くの方に見て、知って、学んでもらい、忠順さんの生きざまに共感していただける、そんなホームページにしていきたいと思っています。是非、一度「村上忠順翁顕彰会」で検索していただきご覧ください。最後になりますが、今後もし忘れてはならない人としての大切な心を磨き、今を生きる我々が必要なことは何かを伝えさせていただく、そんな顕彰会活動としていきたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願い致します。

+++++

歴史探訪感想文

「村上忠順ゆかりの地を訪ねて」

西岡町 大奥 茂二

村上忠順翁を初めて知ったのが区役員のなりたてのころで顕彰会の説明をうけました。高岡町で生まれた国学者であり、歌人そして医師でもあることを聞かされていました。今回、村上文庫で見た様々な書籍が偉大さを痛感し再認識することが出来ました。又、その書物を、後世に伝えるためにご子息をはじめとし、森銑三等の努力によって受け継がれたことで歴史の知識が深まり、豊かな気持ちになれ有難く感謝するばかりです。

昼食は、日本料理を堪能し良き時でした。ゆったりとした気持ちで魚たちを観察できた碧南水族館も良いところでした。

白だしに込められた、ありがたいの里、感謝の気持ちの大切さが『だし』として商品に拘りを持っている醸造会社が好きになりました。

バスに乗り、歴史探訪、充実した時間を有り難うございました。そして、おつかれ様です。

忠順ゆかりの地を訪ねて

高岡町 倉橋 務

十一月十日小春日和の穏やかな日に、三河路の旅に出ました。

最初に到着したのは、「刈谷市中央図書館 村上文庫」でした。「村上文庫」では江戸時代末期、村上忠順が全国から書物を集め購入又は書き写した書物二万五千冊、娘婿深見篤慶が千巻舎を建て収納。

これらの貴重な書物を散逸する事を危惧した刈谷町の穴戸俊治、藤井清七（町議会議員）この二名が私財を投じて一括購入、更に図書閲覧室と書庫を新築し刈谷町に寄贈して刈谷図書館が始まり、大正四年創立となる。「村上文庫」にはその二人と蔵書を分類・整理した刈谷町出身の森銑三、当時の写真と共に展示されている。

忠順の書物が重要とした着眼点、私財を投じ更に分類、整理させた事に感銘を受ける。

次に訪れた所は「十念寺」、このお寺は刈谷藩主土井家の菩提寺で阿弥陀如来を本尊とし十一面観音菩薩立像が市指定文化財になっている。

土井家は、徳川家康・秀忠・家光の三代に仕え、家光時代大老を努めている。

次に訪れた所は「刈谷市歴史博物館」。

刈谷の歴史に親しみ、見て、触れて、体験して学ことが出来る施設として平成三十年三月二十四日会館しました。

当館は、亀城公園、市体育館に隣接しており、開催中の企画展『深溝松平家展―家忠・忠利・忠房・と刈谷―』では、学芸員の山下さんより特別講演がありました。深溝松平家は、戦国時代に三河国深溝を本拠とした一族です。

四代家忠が記した「松平家忠日記」は重要文化財で歴史資料として重要なもので、六代忠房は刈谷藩主を務め、同家と刈谷の関係について紹介しています。

次は江戸時代から現代に跳び、三河湾に面する港町碧南によりみち。

一つは碧南海浜水族館で数多くのお魚に巡り会いました、二つ目は醸造が有名で「白醤油発祥の地」「日本最古のみりん」もこの地の誇り、中でも「七福醸造(株)」は国内唯一の白醤油の会社、工場内タンクに「ありがたい」の文字が書かれ、そうする事により旨味がより多く出るといわれている。そう言われ私も試食し、白醤油を一本買ってしまった、「ありがたいの里」。

こうして三河路の旅は終わり一路帰路に着いた。

村上忠順「歌合序文」と井上文雄

國學院大學文学部兼任講師

中澤伸弘

刈谷の村上文庫に寺山吾鬘が判をした『二百番歌合』がある。秋冬十二題の忠順の周辺の三河歌人十八人の詠を番へたもので安政三年十一月の序文があるのでその頃のものである。この本は平成十七年に築瀬一雄先生が翻刻されて、村上忠順叢書の第五として刊行されてゐるが、九十三歳の老先生には厳しいものがありであつたやうで幾つかの誤翻刻があるのが残念である。本来この歌合の判は江戸の小林歌城に依頼したものであつたやうだが、何かの事情でその門弟の吾鬘がやることになった。吾鬘はこの年の三月に忠順の依頼で『百番歌合』の判をしてゐて、これも村上文庫にある。

吾鬘ははじめに「此判詞ども匆卒にものし侍れば書損等おほく候半歟 心して見給ひてよ」と書き付け、この判詞が時間をかけたものではないことを断つてゐる。忠順は吾鬘の判に対し所々に自分の所懐を頭注として書き付けてゐるが、四十一番の忠順の頭注の文末に「文雄云玉アラレニ云々トアルハカタクナシ・」とあるのが気にな

つた。文雄は江戸の井上文雄である。この文雄云は忠順が伝聞として書いたものなのか、または本書を見て文雄が書き付けたものなのか、翻刻ではそれがわからないでいづれ本物にあたる必要を思ひつつ果たさずにゐる。忠順は井上文雄とも深い関係にあつたし、文雄は忠順の『百番歌合』（村上文庫）に判を加へてゐる。また村上山家所蔵の『蓬蘆雜抄 角力哥合』に綴じられてゐ



—「歌合」の序文の草稿と思はれる紙片—

る「質問」と題する数丁は忠順の質問に文雄が書き付けた自筆稿である。

村上山家所蔵の『蓬蘆集春夏』（村上山目録九二）に御祝儀と書かれた紙片のほか竹尾正胤の書翰などが挟まれてゐるものがある。その中に「歌合」の序文の草稿と思はれる紙片が一枚ある。忠順の特徴ある筆跡で書かれたもので、それに所々に別人が朱で訂正や書き込み、頭注を三か所に書き付けてゐるものである。文末に忠順の筆で「かゝるえせ文もみなほしをえ侍らば ゆるやうになりなんや 引書し給ひてよいかでいかで」との依頼文があり、それに対し朱で「のたまふまゝにおほけなけれど筆加へまゐらす」とあることから、忠順の依頼を受けて加筆訂正したものであることは明らかである。次に翻刻しておく。

歌合といふわざはみやびをたちのものしたまふ事にて 片山陰に柴かるをのこ 門田におり(立)て根芹つむをとめなどのすさびにはうちあはぬものから ともすればおほけなき心○をふりおこしさいやしきをゆきをもとめ(ものどもの)い(か)でものしてむなと(て)いひあふめをふるやしろのえせかむなぎ 山寺のしこ法師など そのかしつれば ○おのもおのも

よこなまりがちにいひ出る事になむなり
 (○侍り)にける されどなには津安積山
 をだにはかばかしうつけえず そがひのに
 の角をしも書あへぬしれものどもの言の葉
 本(にし侍)れば はかなき童謡にもいた
 くおとりて てにをは言葉のはたらきなど
 いふ事は 夢のうき橋かけても思ひわたら
 ぬ(ず) 事にしあれば ぬひ人の寝言きく
 (き給ふ)らむ心ちこそせ(し給は)め
 かくて百人一首をだによみえぬ力なきかへ
 るのうた袋 うたひいづるを力なきみづ
 のみらず書にしつる世(を)やがて此十と
 ぢになむ されをしも歌合と(して)いは
 むはいとをこなるわざ本(に侍)れど さ
 すがに童謡合ともいひがたければ(くて)
 かのみやびをたちのにならひて 若松歌合
 とはうは書し(侍り)つ かゝるものをも
 よさまにひきなほしたまはむには百にひ
 とつも聞ゆるやうになりなむや いかでよ
 しあしごとにかたまひねかしとこひねぎ侍
 るになむ
 ○此をもじなきかた語勢たちはへて文章に
 も語勢を出せり如し給ふべし
 ○おのおのおの無くて一へんのさまかはらず
 ○かゝる語になし侍るは引直しがたきわざ
 に侍れど結尾の文かりうちあひ侍らねば
 なり ゆるし給へ

御文章□く直し侍り 但しよきかたへを
 と いさゝか思ひよれることかいつけ侍
 り

実はこの『二百番歌合』にある序文は、
 この直す前の序文なのである。(但し書名の
 若松歌合は二百番歌合に改まる)といふこ
 とは忠順は吾輩から判詞が書かれて戻って
 きたのちに(又は前にか)序文を付けたも
 の、自作の序文が納得いくものではなか
 ったやうである。安政三年以降忠順の頭
 中ではこの序文が燦つてゐたやうである。
 ところでこの朱の加筆の主の名はどこに

も見えないが、筆跡から井上文雄であると
 言へる。文雄の筆跡は短冊などをみればよ
 くわかるが独特の書風であつて、見紛うこ
 とはないものである。文雄は歌人でもあつ
 たが文章家としても名があつた。ここでも
 注目すべきは丁寧表現の「侍り」の使用に
 ついて、文末に「侍り」を使った整合性の
 ために本文中にも使ふべきである旨注記し
 てゐる点など注目できる。

忠順は氣になつてゐたこの序文を引き直
 して貰つたものの、そのまま放置された
 のはなにかしら理由があつたのであらうか、
 謎である。

(原文のまま)

特別寄稿 徳川家康と大野東龍寺

令和四年度定例総会 記念講演講師

郷土史家 千賀哲郎

東龍寺の歴史は貞観六年(八六四)に始
 まる。当初は天台宗を宗派としたが永享年
 間に浄土宗に改宗している。東龍寺を有名
 にしたのは永禄三年(一五六〇)の桶狭間
 の戦い時である。

当時今川方の家康は大高城を占拠してい
 た。今川方の敗北を聞いた家康は織田軍と
 の遭遇を避け、急遽舟で知多大野へ避難し
 東龍寺を頼った。同寺は家康を岡崎へ逃亡
 させる便宜を図ったと同寺の古過去帳に記
 録される。その際、家康の後続部隊は陸路
 で大野を目指したが、知多日長辺りで織田
 軍と遭遇し激戦の末敗走したと伝えられる。
 今川に勝利した信長は海運と鍛冶、商業
 が盛んな大野との関係を重視、大野城主で
 ある三代佐治八郎信方に実妹の「於犬」を嫁
 し関係を強めた。その際、東龍寺に対して
 も年四十石の朱印状を与え保護した。しか
 し三代信方は長島一向宗との戦いの際、二

二才の若さで戦死。その子、四代佐治与九郎は幼少であった為、信長は代わって弟、「織田有楽斎長益」を新たな大野城主として着任させた。

天正九年（一五八一）、信長は大野を戦略的な要地として強化するため織田有楽斎に對し、大野城の数倍の規模となる「大草城」の築城を命じた。この大草城が完成しておれば新たな水軍の城「大野城」に改名される事も予定されていた。信長はこの新大野城から知多経営を統治することを企図し有楽斎に託したと考えられる。

しかしこの大草の新城は、本能寺の変、その後の小牧・長久手の戦の混乱を経て、築城は中断、結局廃城となり幻の城となった。

信長から東龍寺に与えられた四十石の朱印状は、豊臣秀吉の代になると反故にされている。天正十年（一五八二）六月二日京都で本能寺の変が起きる。当時信長の自刃を堺で聞いた家康一行は、直ちに苦難の伊賀越えを経て、今の鈴鹿の白子辺りから舟で伊勢湾を横断し最短の常滑を目指した。

しかし常滑でも、水野監物に不穏な動きが見られた為常滑で一旦船を降りたものの、再び舟で大野へ移動、そして大野の東龍寺を頼った。その後、常滑の水野監物が明智光秀に加担していた事、山崎の合戦でも明智方へ合流した事が明らかになった。

当時の大野東龍寺住職は九代洞山祖誕生人であり、同師は家康母の「於大」の妹と吉良赤羽根城主高橋弾正の子で、家康とは従兄弟にあたる。その際家康は上人に岡崎までの逃避に必要な軍資金の調達を依頼、上人は近隣の十王の豪商、薬屋市左衛門とも協力、合わせ一五〇両を用立てた。家康は痛く喜び「世が平穩になれば必ず返済する」と感謝したという。三日前後大野に滞在したが、家康が、宿泊したところは、後に、尾張藩主の為の「大野御殿」と呼ばれた当時の大野の庄屋、平野彦左衛門の屋敷であったと記録に残されている。

家康一行は大野を出て、徒歩で成岩（現半田市）に向かったが、道案内をしたのは衣川八兵衛と記録される。衣川は常滑、市場の出自で、家康一行の道案内に立った。

成岩では、洞山上人の実弟で、同じく家康の従兄弟にあたる常楽寺の典空頭朗上人の歓待を受けた。その後、家康一行は舟で成岩から碧南大浜辺りに到着、松平家忠等の出迎えを受けそして岡崎に無事帰還できたと「家忠日記」に記されている。

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いが東軍勝利に終わると家康は、伏見城に洞山上人と薬屋市左衛門を招き、これまでの貢献と支援を謝し、東龍寺には年四〇石の朱印状と宝物を与え、また薬屋市左衛門にも借金と利子そして宝物・商権等を与えた。特に東龍寺への四十石の朱印状は十四代将軍家茂の代まで続いた。家康の東龍寺への感謝の気持ちがかかる。東龍寺には他に家康の母、於大から下賜された家康の青年の頃の珍しい肖像画に加え、家康、秀忠、家光三代の朱印状の原本、その他、家康から拝領した数々の宝物、絵画、像等が残されている。

又東龍寺の古過去帳には、戦国・江戸期における家康との関係について全て時の代官へ報告され、認知を受けてきた記録もある。

るので、今でいう公文書と見なしてよいだろう。

因みに、大野には家康の親族がもう一人いた。家康母の於大の姉、「於丈」で、元は形原深溝城主、松平家広の内室であつたが、在所の水野家が今川から織田へ所屬替えをした為、離縁され、その後、大野光明寺の住職淨祐に再嫁していた。家康が当地で「於丈」と再会し、余りに母「於大」に似ていたことから涙したという伝承がある。

この様に時の権力者は、大野を知多半島最大の海運・鍛冶・商業の戦略的要地と見なしてきた経緯があり、特に戦国から江戸期への歴史の変遷の中で多くの逸話が残された。

令和四年度活動報告

○ 五月十五日

定例総会 参加者 九一名

*「忠順大賞」表彰式 対象者二十名

*記念講演 「古文書から見たマイ・

ルーツと知多大野」

講師 千賀 哲郎氏

○【中止】 女性部研修会

○七月十九日 第一回役員会実施

*顕彰会発足経緯について

*四年度事業・予算計画

*会費徴収について

○ 四方樹大学

・ 九月二日 ・ 十月七日

・ 十一月四日 ・ 十二月二日

受講者延べ 六十九名

*講師 名古屋大学 大学院教授

塩村 耕先生

*講義内容

忠順翁の『座右記』

○十一月十日

歴史探訪 参加者 四十名

「忠順翁ゆかりの地をたずねて」

*刈谷市中央図書館 村上文庫室 見学

*土居家菩提寺『十念寺』参詣

*刈谷市歴史博物館 見学

*碧南市「小判天」昼食

*碧南海浜水族館・七福醸造見学

○十一月二十日

『第二回みんなで楽しむ短歌づくり』

受講者 十八名

*講師 久米 翠雲 先生（忠順大賞選者）

○十一月二十三日

忠順翁命日墓参と第二回役員会実施

第十七回「忠順大賞」入賞作品

応募総数 一三九八首

選 評 久米翠雲先生

○ 小学生の部

豊田市長賞

堤小 六年二組 古賀 清敬

白いゆげ白い息吐き きね下す

皆でついたもちつきりれー

※庭に石うすを置く。家族で役割を決めもちつきをする。つく人が大変、順番に。温かい師走の風景。

豊田市議会議長賞

堤小 六年二組 横川 千暁

弟と仲よく上げるたこ二つ

空の上ではけんかのよう

※仲良し兄弟のたこあげ。仲良くしていた、たこが空でもつれる。「なかよし」と「けんか」が

面白い。畑かな、広場かな？

豊田市教育委員会賞

堤小 三年一組 加藤 虎太郎

お正月消防出初かんえつ式

ピタッとポーズ銅像みたい

※消防士さんの動きはキビキビとしている。ピタッとポーズが決まり、放水開始。第五句目で決まりだね。

中日新聞社賞

堤小 一年一組 三和 千咲

いとがはるピンとのびて手がいたい

わたしとたこでつなひきみたい

※広場かな。北風に乗って、たこ糸がピンとはる。しんけんわたしとたこのつなひきだ。手がいたい。でもたのしい。

会長賞 金賞

駒場小二年一組 三吉 海華

お正月楽しみにしてたおせちりようり

うーんこれは大人のあじね

※見た目もよく、これはおいしいそうと思ったが、あじはわたしにはあわない。「大人のあじね」が、面白い。

○中学・一般の部

豊田市長賞

前林中二年六組 鈴木 花音

夏祭りカランカランと下駄の音

手には焼きそば空には花火

※昔懐かしい祭り風景。下駄の音が聞こえるようです。下の句がいいですね。絵になる風景。

豊田市議会議長賞

前林中三年二組 浜崎 大輝

何事も慣れてしまえば日常か

マスク越しでも全力笑顔

※上の句は一面では怖いですが、マスクなしが非日常。救われるのは下の句の和を保為の努力する作者、すごいね。

豊田市教育委員会賞

前林中二年三組 國料 咲翔

夏の夜闇夜に咲く可憐な華

今宵の魔法線香花火

※ファンタジーな雰囲気作品。線香花火の美しさ、可憐さをこのような目で見られる、素晴らしい。

中日新聞社賞

刈谷市 長寫 秀雄

草刈るる見通しの良き土手の道

歩めばかえる十四の冬に

※土手の道の草刈り後の風景は懐かしい。周囲の景色が変わっても、目の前の風景は、直ぐに

通いなれた中学生に戻す。思い出の道。

会長賞 金賞

前林中二年五組 滝澤 芽依

一人だけ持ってきていたホッカイロ

順にまわして皆あたたまる

※寒い朝、ホッカイロを持参しての登校。寒さが厳しくなった。友達にまわして暖をとる。優しく素晴らしい心です。

十入賞作品の一部を掲載しました、作品全体は別紙をご覧ください。

あとがき

一昨年に続き四年度前半のコロナ禍に伴う、厳しい行動制限の中、感染症対策にも慣れ、要領も得て後半には、歴史探訪が再開出来ました。今年は既にマスク着用が一部緩和され、五月には「新型コロナウイルスの五類移行」が決定しました。今年は、通常通りの活動が期待されます。

さて今回の表紙に『村上文庫』紹介写真を掲載しております。一方、中澤伸弘博士の記事の冒頭で『村上文庫』の記述は必然的一致と確信し、『村上文庫』訪問の選択は、正に的を射ており、ささやかな喜びを戴きました。

同時に今後の『村上文庫』訪問に楽しみが増えました。(事務局 寺田)